

## 基調講演



### 熊野古道に外国人観光客を呼び込もう！

～世界に通用する観光地を目指すブランド戦略～

田辺市熊野ツーリズムビューロー会長

多田 稔子 氏

きょうは、景観のシンポジウムということなんですけれども、私は観光の部分でいつも活動をしています。観光をやっていると、どうしても景観とは切っても切れない関係が出てきます。そういう角度で、今日のお話を聞いていただけたらと思います。

タイトルが「熊野古道に外国人観光客を呼び込もう！」ということで、世界に通用する観光地を目指してきた 12 年間の活動をお話させていただきたいと思います。

トップページに使っています地域の人たちの笑顔の写真(図4-1)なんですけれども、観光によるまちづくりの行き着く先は、こういうことだと思うんです。地域で暮らす人たちが、いつもにこやかに生活できている、そこに観光客が訪れて気持ちよくなる、こういうふうな相互の関係が生み出せることが我々の活動の目標であり、最終の到達点かなと考えまして、これをトップページに使わせていただきました。



図4-1 地域の人たちの笑顔

### 田辺市の概要と地域資源

少し、私の住んでいる田辺市のことをお話させていただきたいと思います(図4-2)。

紀伊半島の南西部にある和歌山県。和歌山県って四国にあるんじゃないかと思われている方もいらっしゃるかと思いますが、紀伊半島にあります。その和歌山県の面積の約 22 パーセントが田辺市という、合併によって、そういう広い市になりました。1,026.9 平方キロメートルということで、どうでしょうか、つくば市とは対照的だと思うのは森林面積が9割なんです。ですので、これだけ広いところに平地が10パーセントしかありません。

人口が約7万4千人。合併当初が8万4千人でしたので、この12年間で1万人減っています。つくば市は多分増えているんですね。人口が減るという現実を、まだ皆さんおわかりにならないと思うんですけれども、観光によるまちづくりをやっていく点においても、人口が減っていくというのは本当に大変なことなんです。地域の暮らしが大変になってきます。そんなお話も、後ほどちょこちょこさせていただきます。

アクセスですけれども、JR新大阪駅からJR紀伊田辺駅まで、約2時間強かかります。非常に新幹線から離れていますので、辺地なんです。陸の孤島とも言われています。東京からは、実は羽田空港からお隣の南紀白浜空港というところに飛行機が飛んでいまして、約1時間。その空港から車で20分という、意外に観光エリアとしては便利のいいところかもしれません。

合併ですけれども、ここに書いてあります、五つ

の市町村が合併しました。12年たって、ようやく、少しずつ一体感が出てきたかなというところなのです。



図4-2 田辺市の概要

その田辺市の地域資源といたしましては、何と言っても、世界遺産の「熊野古道」があります。メインルートとなる「中辺路ルート」というのが市を横断しています。

それから、熊野三山という世界遺産の構成資源があります(図4-3)。(田辺市の)と書いていますけれども、一番上の熊野本宮大社だけが田辺市で、あとの二つは別の市町村になります。しかし、観光をやる場合、自分の町だけのことをやっていたのでは、観光資源として生かせないのです。熊野三山というぐらいですので、この三つがきちんと説明されてこそ、価値があると思っていますので、私たちは、自分たちの町のことだけじゃなくて、よその町の観光資源ですけれども、きちんと説明するようにしています。



図4-3 (田辺市の) 地域資源

それから、温泉もたくさんあります。日本三美人の湯として有名な龍神温泉ですとか、世界遺産で唯一入浴できるというつぼ湯という温泉、それから、川を掘れば温泉になるという川湯温泉。多彩な温泉があります。

それから、特産品としましては、梅と柑橘が有名です。南高梅は皆さんよくご存じかと思いますが、柑橘も約80種類ぐらいありまして、年間を通じて栽培されています。

また、世界的に有名な人物、植芝盛平という合気道の創始者です。こちら、茨城県では、笠間市ですかね、合気神社がありまして、姉妹提携を結んでいます。それから、博物学者でもあり、民俗学者でもある南方熊楠。武蔵坊弁慶は、歴史上の人物かどうかはちょっと不明ですけれども、弁慶といえば誰でも知っている、この武蔵坊弁慶が田辺市の生まれであると、私たちは信じてやみません。

それから、日本のナショナルトラストの発祥の地、天神崎というような、こういう本当にいろいろな観光資源があります。

### 田辺市熊野ツーリズムビューローの経緯

そういう中で、私たちは観光の団体として合併の1年後に立ち上がったんですけども、今の観光協会というのは、旧市町村のままの団体があります。これは、本当に広域であることや、観光協会と言っても、業務内容が全部違うからです。本当に誘客に熱心なところもあれば、市民活動的な観光協会もあったり、村のお祭りを支えているような観光協会もあったりして、合併することが観光振興につながるかどうかという議論のもとで、今なお存続して、そのまま活動しております。

しかし、合併の前年に世界遺産に登録された紀伊山地の霊場と参詣道、熊野古道を含む市となった我々観光をやる者として、ばらばらでいいものかという議論から、観光協会はそのままでそれぞれ活動するものの、市全域の観光プロモーションをやる団体を立ち上げさせてください、民間で、と市長に直談判をいたしまして、市長もあっさり、いいよということで、設立をさせていただきました。



も世界遺産を活用した観光をやっていくということで、最初に、観光戦略の基本スタンスというものを話し合いました。そこで申し合わせたのが、この五つです。

「ブーム」より「ルーツ」でいこう。すぐブームをつくって、人を呼び込みたいんですけども、それは一過性です。ですので、そうではなくてルーツ。文化や歴史を大事にした観光をやっていこう。

それから、「乱開発」ではなく、「保全」や「保存」を大事にしたい。世界遺産を守るということはそういうことでもあるんです。

そして、「マス」より「個人」。これは、団体でたくさん来ていただくと、うれしいんですけども、そういうデスティネーションじゃないよね、熊野古道は、ということで、どちらかというと、個人で歩きに来てくれる人たちに重きを置きたい。

そして、「インパクト」を求めず、「ローインパクト」に。インパクトを与えれば、お客様は一時来ますけれども、同時に、地域にもインパクトを与えるんですね。生活の場ですから、一気にたくさんのお客様が来たら、どうでしょうか。生活が脅かされますよね。かつての観光地というのは、たくさんのお客様が一時に来て受け入れられるような観光地づくりをしてきました。それは、意外に、住空間と観光地が分かれているんです。しかし、この熊野古道沿線というのは生活の場そのものですから、暮らしを守らなければいけない。あまりインパクトを与えず、ローインパクトで、細々と何年も続くような観光の戦略を組んでいこうと申し合わせました。

そこで、世界に開かれた上質な観光地を目指そうということで、設立当初から、インバウンドの推進を一つの核と置きました。そこから出てきた言葉が持続可能ですので、観光地田辺市を目指そうということでした。

## 世界遺産登録直後の苦い経験と 旅行業務の変化

やみくもに、こういう観光戦略を決めたわけでもなく、実は背景もありました。それは、世界遺産登録直後の苦い経験、と書きましたけれども、世界遺

産に登録されると、一瞬、本当にたくさんの方が訪れます。世界遺産バブルといいます。田舎の村に、1日100台もの観光バスが押し寄せました。どういう観光の仕方かという、小一時間ぐらいの滞りで次の観光地へ行くんです。そうすると、熊野古道と言われても、ただの山道でしかない印象ですよ。服装や足元の準備も不十分で、道も荒れ、古道沿いの植物が採取される。お客様も何がいいのかわからないし、地域住民もストレスがありました。熊野というのは、もっとゆっくりと味わってもらおうところだし、熊野の本来の良さは、ゆっくりとした観光でないと味わえないという思いを、語り部と呼ばれる観光ガイドの皆さんを中心に持っていました。

また、一方、インバウンドを取り入れたというのは、ちょうど私たちの組織が立ち上がったころ、インバウンドというような言葉、あるいはビジット・ジャパン・キャンペーンというような言葉がちらほらと聞かれていたということもありました。これから、日本という国は、海外に門戸を広げる、そういう時代を迎えるんだなというような機運が感じられました。最近でこそ、インバウンド、インバウンドと言いますが、十何年前というのは、日本の旅行業界というのは、ほとんどがアウトバウンドでした。日本から海外に連れて行くことでビジネスが成り立っていました。そうではなくて、海外から、日本にお客様を呼び込もうというのは、この10年なんです。一気に盛り上がっているように見えますけれども、わずか10年。日の浅い形態です。

こういう背景があったところに、実は田辺市内には大型宿泊施設が少なかったんです。100室規模を超えるような大型宿泊施設が乱立しているようなところでは、マスより個人なんて、口が裂けても言えません。やっぱり団体のお客様で伝承をつくっていかないと、明日のお客様が来ません。ラッキーなことに、田辺市内には、大型な施設がなかったというのが、先ほどの五つの観光戦略をまとめられた背景にあります。

## ターゲットは欧米豪のF I T

### 外国人を呼び込むには外国人の感性が必要

そこで、とにかく目的意識を持って旅をする人たちに熊野を伝えたいということで、インバウンドということも考えた結果、ターゲットは、欧米豪のF I T、ここだ、と決めました。外国人個人旅行者のことをF I Tといいます。何のリサーチをしたわけではないんですけれども、もろもろの勘の中から、こう決めました。

旅の仕方というのは、進化すると言われます。今、中国の方々がたくさん訪れてくれますけれども、ほとんど団体です。日本人も20年前は、団体で海外に行きました。今の中国人がしている、旗の後ろをついていくような旅行の形態です。しかし、20年たった今では、海外でさえほとんど団体では行きませんよね。全て個人手配に変わっています。そんなふうには、旅行、旅というのでも進化していきます。進んだ旅の仕方、目的意識を持って旅をするというような旅の仕方をしているのは、やはり欧米豪のF I Tだったんです。こういう人たちでないと、ゆっくりと熊野古道に来てもらえないとか、ゆっくりとするような旅は好まないだろうということで決めました。

これが行政とは感覚が違うとこなんです。もうすぐ直感的、感情的に動いてしまうんですけれども、外国人を呼び込むには、外国人の感性が必要だろうと。日本人の目線でいろんなことを考えたところで、ギャップもあるし、正しいかどうかわからない、時間の無駄だ、ということで、いきなり外国人を雇用しました。ブラッド・トウルというカナダ人です。彼は、ロッキー山脈の山脈ガイドなんかを経験しているんですけれども、何よりも、旧本宮町というところで、A L Tとして3年間ぐらい日本にいました。とにかく日本が大好き、熊野が大好きというカナダ人でありましたので、彼を招聘することにしました。ここから先は、彼の目に映る熊野のよさ、そして、彼の、外国人の視線による整理です。

彼の目から見ると、田舎や熊野はとっても良いと言うんです。本当に田舎の町、村なんですけど、何が良いんですかというのと、東京ではない、東京とは正

反対の風景だと言います。しかし、熊野は京都でもないんです。ちょっと話はそれますが、京都を十分観光したお客様、特に外国人が、京都に飽き足らずに、もっと日本を知りたいということで熊野に来ます。すると、とっても良いと言うんです。京都のほうが良いじゃないと思うんですけれども、熊野を良いと言う人たちはどんなことを良いかというのと、確かに、京都の社寺仏閣というのは立派ですし、国宝も多いし、良いんです。ところが、そこを一步離れると、もう、まちの雑踏です。風景に連続性が持てない、気分が途切れる、というんです。すると、興ざめるらしいんです。せっかく、日本的な良い文化、歴史に触れながら、そこを出ると、京都といえども普通の町なんです。でも、熊野は違うと。どこまで行っても山の中ですから、気分が途切れなとおっしゃってくれます。

先ほどのブラッドに、何がそんなにすばらしいか、この地の何が良いの？と聞くと、田舎の生活と文化が良いと言います。こんな風景です(図4-6)。それから、精神的な文化も良い。宗教が違うので、受け入れられにくいのかなと思うと、そうでもないんですよ。そして、伝統的なお宿が良いと。これ(図4-7)、本当、昭和ですよ。日本人は少し敬遠するかもしれないような、そういうお宿が良いと。それから、ただ見るだけ、食べるだけではなく、熊野古道を歩くという体験がある。もちろんおいしい和食に、温泉も良いと言います。



図4-6 田舎の生活と文化



図4-7 伝統的な宿

そして、熊野川。これは唯一かもしれません、川が世界遺産に、参詣道として認定されています。この川の何が素晴らしいかというと、これは個人的な感想なのですが、この川船下りでずっと海まで下っていくんですけれども、両脇に、ほとんど人工物がないと言っていいぐらいなんです。ガードレールぐらいです。しかも、そのガードレールも、最近、茶色にしてくれましたので、本当に風景になじみます。1,000年前もこんな風景だったのかなと思わせるような風景が展開します。そういうのもやはり良いんでしょうね。

そして何よりも、人が親切で優しいと言います。これがファンタスティック、と言うんですけれども、いかがですか、皆さん。そんなに特別なものではないですよ。世界遺産に認定されているということは特別かもしれませんが、幾つかお見せした風景は、それほどびっくりするような風景ではないと思うんです。

私たちも、ブラッドというカナダ人の目から見た熊野を感じることによって、自分たちの良いところを再認識しました。普段見慣れているので当たり前なんですけれども、視点を変えると、どんなに素晴らしい宝が眠っているかもしれないということを感じます。

## 現地のレベルアップ①

### ローマ字表記の統一と看板整備

しかし、こんなに良いものがありますが、彼が初

めて熊野に来たとき、こんな感覚だったと言ってつくってくれた1枚(図4-8)なんですけれども、アラビア文字ですね。皆さん、これを見て、どんなふうに感じられますか?書いている内容がわかるという方はないでしょうね。いますかね?何を書いているのやら。親しみは持てますか。安心感がありますか。ないですよ。こういう状況だったと言うんです。つまり、外国人を受け入れるための何の整備もないんです。ただ、風景がすばらしい、人が優しい、それだけなんです。それでは、なかなか来てもらえません。

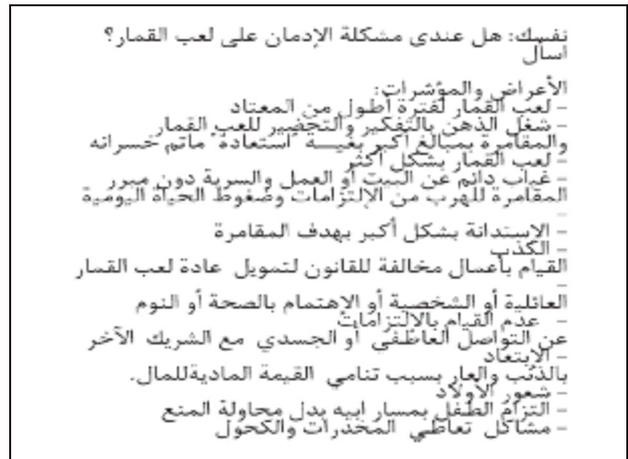


図4-8 アラビア文字

ということで、現地のレベルアップというのを最初に取り組みました。私も何を言っているのかわからなかったことがあるんですけれども、韓国のチェジュ島に行ったときにドラム式の洗濯機がありまして、1週間ぐらい滞在していますから使おうと思ったのですが、使えない。日本のドラム式とは方式も違いますし、わからないのですよね。なるほど、こういうことかと。せっかく便利なものがあったとしても外国人には使えないし、残念な結果になっているということ、身をもって体験しました。

さて、先ほどのアラビア文字ですけれども、下にアルファベットをちょっと振ってみるとどうでしょうか。アブダビ、ドバイ。読めますよね(図4-9)。ローマ字が表記してあれば何とかなる。全部訳することはないんです。ほんのちょっとした心遣いで、親しみも湧くし、安心感も生まれる。こういうことからやっていきました。しかし、私たちの周りに立ちほだかったのは、ローマ字の表記をどうするかということです。規則がないんです。ヘボン式、

日本式、訓令式とか、いっぱいあるから訳し方がいっぱい出てくるんです。でも、決めていかなければならないので決めました。

英語の訳もそうです。先ほどの熊野本宮大社に至っては19通りもありました。これでは、19社の熊野本宮大社があるということなんだよと言われ、統一しています。ということで、Kumano Hongu Taisha、こういうふうにしよと決めまして、いろいろな表現を全て統一していったのです。



図4-9 ローマ字表記

もう一つ、看板の問題があります。これは世界遺産に登録された直後の熊野古道です(図4-10)。よくこんなので世界遺産になったなという気もしますが、様々なデザイン、材質、統一感のない設置のされ方。こんな状況だったんです。こういうのもあります(図4-11)。とても親切なんですけれども、外国人には、これが熊野古道だと言っているふうにはしか見えませんよね。



図4-10 看板整備前1

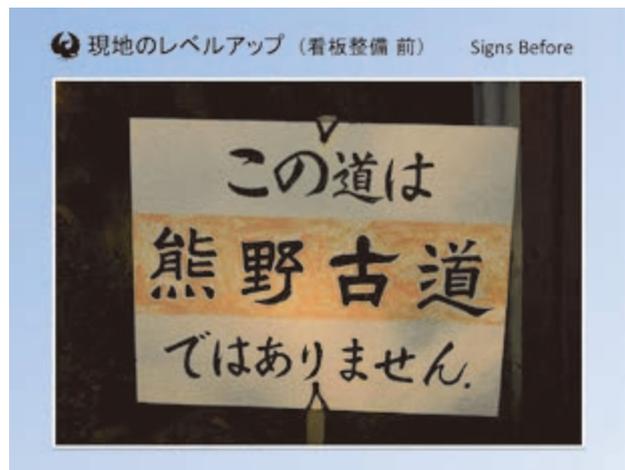


図4-11 看板整備前2

でも、今ではこんなふうに整備されました(図4-12)。和歌山県や田辺市の協力で、私たちがアドバイスというか、提案して、変えてくれました。看板というと、ただ、立てればいいと思っていたんですけども、基礎からきちんとして、こんなふうなのにするのに非常にお金がかかるらしいのです。熊野古道は何10キロメートルとありますけれども、数千万円かかったと聞きます。こういうハード整備というのは、やはり行政でなくてはできないことだと思います。看板を設置するには補助金も出やすいんですけども、要らない看板を撤去する補助金はないらしいんです。だから、すごくお金がかかるんだと言われたんですけども、こういう整備がされてこそ、観光のお客様を呼び込めるんです。



図4-12 看板整備後

さて、もう少し、英語の訳を進めます。熊野古道、これ、訳がありますかね?自由に熊野古道を訳していたのでは、今のインターネットの時代、検索にも

上がってきません。それで、私たちは、熊野古道は Kumano Kodo、こんなふうに表示しようと決めました。温泉も、ちょっとニュアンスが違うんですけども、Spaとか、Hot Springとか、いろいろな言い回しがありますが、どれも温泉ではない。温泉は Onsenでしょ、日本人は日本の文化を大事にしないの？と、もう、本当に怒られたんです。私たちの特産品の梅や、梅酒や、梅干し。これもいろいろな言い方。日本人、ちょっと何か親切心でしょうか、相手の国をいたわるといようなことをするんですけども、どれもだめ。やはり、Ume、Umeboshi、Umeshuと、きちんと自分たちの文化を表現しないとだめだよ、梅はPlumじゃないよ、と。本当に、怒られることばかりでした。でも今は、国がガイドラインを策定し、一応、いろいろな決まりごとができていますので、これから訳していくのは簡単だと思います。

昔の道路標識、川湯温泉はKawayu Spaと表現されていましたが、今はOnsenに全部変わりました(図4-13、図4-14)。日本中、Onsenに道路標識も変わります。観光のセクションのものをOnsenに変えたとしても、道路標識がSpaでは、整合性がとれず、混乱するだけなんです。こういう、細かいすり合わせをやっていくということが非常に大事です。



図4-13 ローマ字表記(ガイドライン前)



図4-14 ローマ字表記(ガイドライン後)

## 現地のレベルアップ②

### コミュニケーションのためのワークショップ

次にやった現地のレベルアップは、ワークショップでした。熊野古道に外国人を呼び込もうとって、ほとんどゼロに近い状態なんです。お宿の方々も、小さな民宿だと、おじいちゃん、おばあちゃんがやっているようなところが多いので、外国人をいきなり受け入れてと言っても、とにかく、そんなことは、英語もしゃべれないし、ときどき電話がかかってきて、英語で何かしゃべられる、何をしゃべっているかわからずうろたえる。そんな状態だったものですから、とにかく、細かくワークショップをやっていきました。それには、先ほどのブラッドが必ず行って、僕が行くことによって、外国人に慣れるでしょ、そしたら、それほど怖いとも思わないから、ということで、延べ60回ぐらいのワークショップを細かく、細かくやりました。でもそれは、外国人を受け入れてもいいよと手を上げてくれた人にだけです。そういう人たちから攻めていきました。宿泊関係者だけでなく、交通関係者や、観光案内所のスタッフ、それから、熊野本宮大社の神職や、巫女に至るまでやっていきました(図4-15、図4-16)。

しかし、英会話教室をやったのではないのです。英語が、外国語がしゃべれなくても、コミュニケーションはとれるように、コミュニケーションをとるために何が必要かというようなワークショップでした。



図4-15 セミナー・現地研修1



図4-17 (右) コミュニケーションツール



図4-16 セミナー・現地研修2

そこから生まれてきたのが、こういう便利ツールです(図4-17右)。指でなぞれば、伝えたいことが全て伝わるというものをつくりました。そうしたら、民宿のおじいちゃんやおばあちゃんも、あ、これなら受け入れられるねと、そんなことになっていったんです。それから、バスの時刻表に、ちょっとローマ字を付けたり、何社もあるバスの時刻表を1枚にしたりということをしました。でも、バス会社というのは非常に腰が重くて、10年ぐらい言い続けたんですけれども、なかなか動いてくれませんでした。しかし、最近、外国人が増えてきて、路線バスにたくさん乗るようになると、こんなこともやってくれるようになりました。熊野外国人観光客交通対策推進協議会、いかにも行政がつけた、長い名前なんですけれども、こんなバス表ができたり、停留所にアルファベットを併記したりとか、そういうことをやってくれるようになりました。

まちの居酒屋に英語メニューを置きました。それから、何と言っても重要なのは英訳です。日本語のテキストを、そのまま英語に訳しても全く通じません。「一遍上人と時宗」と、日本語のタイトルがついていますけれども、こういうことを英語で直訳したところで何のことかわからないです。ですから、本当にかみ砕いて、あるときには全く違う表現にして、魅力が伝わるような英訳を施してくれました。これは外国人ならではの目線での秀逸の仕事だったと思います。ですから、熊野を訪れる外国人は、熊野の魅力を十分に理解し、よかったと言ってもらえていると思います。

### サンティアゴとの共同プロモーション

いよいよ、そういうようなことをやった上で、プロモーションです。プロモーションは、観光のセクションの話ですので、飛ばしていきます。ありとあらゆることをやりましたけれども、一つお伝えしたいのが、左端の共同プロモーションです(図4-18)。世界遺産の道は、数百キロメートルに及ぶものは2つです。一つは、熊野古道。もう一つは、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼です。ここの共同プロモーションを始めました。

和歌山県とガリシア州が姉妹道提携というのを結んでくれていた、このベースがあったからできたことなんですけれども、2008年から、民間同士で、ともに市の観光局同士でやり始めました。それが5、6年後ぐらいには、市と市同士もオフィシャルに結

びついてくれたんです。違う宗教ですよ、キリスト教と、神仏習合。仲良くいかなと不安もあったんですけども、この写真（図4-18 右）を見てください。サンティアゴ大聖堂の、これは聖ヤコブが眠る真上で、熊野の神官が神楽を舞っています。あり得ないですよ。キリスト教の3大聖地のうちの一つです。そこに大司教さんと、本宮大社の宮司と、一緒になった写真ですとか、本当に夢のような光景でした。こんなことになるとは全く思っていなかったのですけれども、一つ一つやっていくと、ある日、突然違うステージになるんです。こういうことを経験させていただきました。



図4-18 共同プロモーション

市同士が観光交流協定を結んだことを記念し、共通巡礼手帳というプロジェクトを始めました。これが現物なんですけれども、片方にサンティアゴ巡礼のスタンプ、もう片方は熊野古道を歩いたという証明のスタンプ。両方きちっとゴールすると、共通巡礼者と認めましょうと。何か特別なことがあるかという、バッジを一つもらえるだけなんですけれども、名誉、名誉というか、自分の誇りだけです。そういうプロモーションなんですけれども、3年前の2月1日に始めて約3年、両方歩いたという人がどれくらいいると思いますか？ちなみに、サンティアゴの道を100キロメートル以上歩かないと、歩いたという証明はくれません。熊野古道は、大体38キロメートルぐらいなんですけれども、両方歩くんです。年間10人ぐらいいるかなと思っていましたところ、ついこの間、1,000名を達成しました。1,000名ですよ、3年間で。こんなに長い道を歩く、ロン

グトレイル、フットパス、こういうことを好きな人たちは、世界中という分母で見たときに、たくさんいるということなんです。どこに観光のネタがあるかわかりません、という事例です。

この共同プロモーションなんですけれども、このスペインのサンティアゴから学んだことがありますので、これをちょっと、今日の景観の話と絡めてお話ししたいと思います。

先ほども申しあげましたように、数百キロメートルに及ぶ道の世界遺産はこの2例です。道というのは、今なお生きている遺産なんです。どういうことかという、歩いてくれないとだめなんです。ですので、私たちは、歩く人を呼び込む観光プロモーションを一生懸命やりました。ただ見に来るだけ、熊野三山をお参りするだけではないんです。とにかく歩いてほしいと。

巡礼道の風景というのは、歩く人によって完成するという事です。人が歩いている、その姿があってこそ道の風景が完成するんです。ですので、私たちは歩く人を呼び込む観光プロモーションを一生懸命にやりました。そうすることによって、道の世界遺産としての価値が高まり、歩く人がいるからこそ、また、道としても守られます。ということかといいますと、山道というのは、1年間ぐらい歩かないと、もう本当に山に戻るんです。歩いていないと、すぐ木が生えてきます。だから、ほどよく歩かないとだめなんです。ということは、保全と活用というのは補完し合う関係だと思うんです。最近、空き家問題もすごくあって、空き家をどうしようかということが、よく議論に上るんですけども、今までの考え方というのは、保全地帯というふうに言って守ってきました。そうではなくて、何かに活用しないと、リノベーションをして、レストランにするとか、ゲストハウスにするとか、今、生きた姿にしないと、歴史的建造物を守れないと思うんです。昔のように、文化財をただ保護して守るという時代ではないと思います。活用しつつ守るとするのが、これからのあり方ではないかと思います。

## F I Tと地元の間交通整理

### 着地型エージェントの設立

いろいろなプロモーションをやることによって、それなりに露出もふえまして、広告換算というものをしてみると、こんなふうになりました（図4-19）。



図4-19 経済波及効果 (2006~2010)

ところが、知名度が高まるにつれ、皆さんも、私の話を聞いて、熊野古道を歩いてみたいと思いませんか？思ったとして、じゃあ、どうやって歩けばいいのって思いますよね。そういうことなんです。しかも、日本語がしゃべれない外国人なら、なおさらです。そこで気がつきました。歩く仕組みもないのに、無責任なプロモーションをしていた。熊野って良いですよ、熊野古道を歩くすごいですよ、よみがえりますよ、みたいなことを、何の歩く仕組みもつくらずに言っていたことに気がついたんです。

そこで、風呂敷を広げるだけ広げてしまったので、ここに着地型エージェントというものを作り、ようやくきちんと歩ける体制を整えました。

それがなかったときというのは、こういう状態だと思います（図4-20）。外国人の個人旅行者と地元・地域の間はぐちゃぐちゃで、交通整理ができないんです。それぞれに結びついていかないと熊野古道を歩けない。しかも、大きな二つの壁があるんです。言葉の壁と決済です。日本って、なかなかカード決済が、特に田舎はカードなんか使えないです。これでは、とてもとても受け入れるって言ってけません。ですので、私たちがこの間に入って、面倒くさいことは、全部取り除いています。言葉の壁

も、決済の壁も。これは、旅行エージェントはたくさんありますけれども、大手はやってくれません。お金もうけにならないんです。

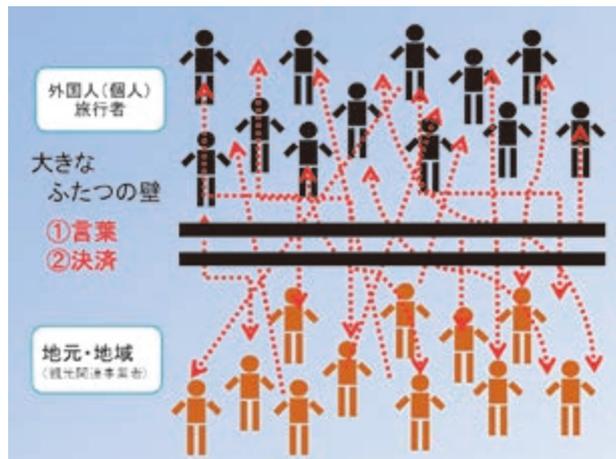


図4-20 着地型エージェントの設立前

アメリカ人が2人、一泊しました。7,500円の民宿です。合わせて15,000円。手数料は最大に取ったとしても1,500円。これでは、大手エージェントはビジネスにならないので、着地型というのをやってくれないんです。でも、この仕組みがないと、私たちのような田舎に外国人が、外国人だけではないんです、日本人でさえ来るといえることではないんです。ですので、ビジネスにはならないけれども、やろうということでやり始めました。

ビジネスにはならないと言いつつも、ちりも積もればで、すごいことになりました。3億円を突破しているんです、旅行業の売上。この3億円というのは、今までの地域にはまったくなかった経済ですので、このぐらいの経済効果があったといえます。ほとんど地域に還元していきますので、約8割はサプライヤーの旅館や、お弁当屋さんや、交通関係者のところに支払います。あとの2割で、私たちスタッフのお給料ですとか、事務所の維持費ですとか、あるいはこういうものをつくったりということをやります。

どういう国から来ていただいているかというところ、一番多いのはオーストラリアです。それから、アメリカ、フランス、イギリス、スペイン。こんなふうになっていますが、エリア別に見ると、圧倒的にヨーロッパです。オーストラリアとかアメリカにはロングトレイルを楽しむ人たちがたくさんいます。で

すので、サイクリングも似ていると思うんですけども、外国人を呼び込みたいなと思うと、こういうところにプロモーションをかけると、意外に来てもらえるのではないかなと思います。

それから、利用施設エリアデータという、真ん中の段ですけども、青い文字で書いているところが田辺市以外のエリアです（図4-21）。そういうところにも送客をたくさんしています。これは行政では非常にやりにくいことだと思うんですけども、我々、そういうときは民間ですって言うんです。民間ですから、別に行政は関係ないですと言って、いろいろなエリアと契約しています。最初は、本当に契約に手こずりましたけれども、去年の3月で150、今では、もう180ぐらいの契約事業者さんが生まれまして、熊野古道を旅するという利便性が非常に高まっています。



図4-21 (中段) 利用施設エリアデータ

入込客数を調べてみたところ、世界遺産登録直後は44万人ぐらいと確かに増えているんです。今は40万人ぐらいなんですけれども、結構健闘していると思うんです。賞味期限が3年と言われる中におきまして、もう十何年も安定しているというのは、非常に成功した事例の一つではないかなと思います。40万人というのは変わりません。ただし、この40万人の中身は変わっています。世界遺産登録直後の40万人というのは、こういう風景です（図4-22右）。観光バスが押し寄せて、旗の後ろについていくような観光のお客様です。ところが同じ40万人でも、今では全く風景が変わっています。こんな感じですよ（図4-22左）。観光バスでというのは本

当に減りました。しかし、それをカバーするように、外国人の歩く人たちにたくさん来ていただいています。今まで、大体100カ国以上から来てくれています。どんなふうに情報収集しているのかというのはきちんと調べたいとも思うんですけども、信じられないですよ、100カ国にもプロモーションをかけられるようなお金はないのに、100カ国以上になっています。



図4-22 (左) 現在  
(右) 世界遺産登録直後

## 地域の誇りが再構築され 地域の価値が高まる

初めに、五つの観光協会が集まって始めたときに、観光戦略の基本スタンスを申し合わせました。これをやり続けてきたことで、地域の誇りが再構築されたように思うんです。どういうことかといいますと、こんな田舎で、こんな山道と地域で暮らす人たちは、少し自分たちをさげすんで生活していたんですね。でも、そういうところに、100カ国以上の外国から来てくれるんですよ。そして、熊野古道は良い、熊野はすてきなところだと言ってくれる。そうしたら、だんだんそんな気になってくるんです。いや、すごく良いところだったんだと、自分たちのことを再認識しました。その結果、地域の価値が高まっていくんです。地域の人が自分たちのことを誇らしげに語れることで、旅行者も気持ち良いですよ、あ、こんなところって言われるようなところに行くよりは、筑波山ってすごいでしょ、この町のどこからでも見えるんですよ。これがあるから、来る人たち

も値打ちがついていくんです。観光という、この手法によって、こういうことができるというのが一番の醍醐味かなというふうに、12年間やって思っています。

今日、川手先生のお話を伺いながら、あ、景観という手法も一緒なんだろうと。最終的には、こういうことなんだろうと思いました。観光という手法もあれば、景観という手法もある。あるいは福祉という手法、教育という手法、いろいろな手法があると思います。しかし、最後にやはり地域に暮らしている誇りとか、生まれてよかったとか、そういうことが味わえるというのが最終目的なのかなと感じました。

観光という手法でいろいろなことをやってきたことが、観光だけじゃないことに波及している様子を幾つかご紹介させていただいて終わりにします。

一つは、道普請というこの熊野古道を整備するというこういう事業です(図4-23)。地域のボランティアはもちろんですが、企業のCSR活動として、毎年たくさんの企業がやってくれます。これ、事業は全部企業持ちでやってくれるんです。入れる土のお金、それから、もちろん人件費は要りませんよね。しかも泊りがけでやってくれるとなると、非常にありがたいCSR活動です。



図4-23 道普請

それから、いつも私は田辺市に、これは田辺市で一番素晴らしい事業だと言うんですけども、語り部ジュニアという制度です(図4-24)。今では田辺市全域の小・中学校の総合学習の一環として、語

り部ジュニアというのを取り入れてくれています。観光から、いつも教育にはラブコールを送るんです。この地域にはこんな良いものがあるので、もっと公教育の現場で紹介してほしいと言うんですけども、教育の現場は余裕がないんです。もう年間のスケジュールがいっぱいで、余分なことはとても取り組みません。でも、市長なのか、教育長なのか、こんなことを市の政策として決めてくれたんです。この子どもたちが大体10歳ぐらいとしますと、10年たったら大人なんですよ。教育ほど結果の早い分野はないかと最近思うようになりました。昔は、教育ほど先の長いものはないとよく言ったんですけども、10年で大人になるんです。大人に10年いろいろなことを教えたところで何も変わらないです。もう大人は放っておいたらいいと思うんですよ。この柔らかい、7、8、9、10歳ぐらいの人たちに教えると、10年たったら全員スピーカーになってくれますし、もう私たちの地域はこんなよと、どこへ行っても言ってくれると思うんです。和歌山県というのは、高校を卒業すると、ほとんどみんな県外に出ていきます。多分、日本の中で1番、2番ぐらいです。それぐらい出ていくんですけども、こういうことをきちっと学んでいれば、また地元に戻ろうかなと思うかもしれませんが、もし、外に出たままでも、観光大使の役割を果たしてくれるのではないかなと思います。



図4-24 語り部ジュニア

それから、JRの紀伊田辺駅の横には、田辺市の観光センターというものもあるんですけども、ここに外国人が本当にたくさん訪れます。カウンター対

応する3人に1人が、今や外国人です。あとは、地元高校生がボランティアで来て来ていますし、商店街では、おもてなし講座みたいなものも開いてくれます。

そして、これはオーストラリアの修学旅行生です。(図4-25) 地元の中学との交流もやっています。本当に半官半民だからこそ、こういう挑戦ができるんです。一旅行会社では、なかなかこういうことはできないと思うんですけれども、こういうことも実現しています。



図4-25 修学旅行ツアーと地元中学校との交流

そして、今日の話とちょっと関連ないかもしれませんが、人口が減って高齢化が進むと、耕作放棄地が増えていきます。世界遺産の一つの概念に文化的景観とありましたよね。耕作放棄地が増えると文化的景観が守れないんです。見るに見かねたIターンの方が景観を守るために棚田を耕して、お米づくりを始めてくれました(図4-26)。お米づくりをしたくてやってくれるのではないのです。景観を守るためにこういうことに立ち上がってくれたんですけれども、これから、これはもう本当に大きな課題になると思います。耕す人がいないんです。追いつきません。ここら辺は、多分、県や市の施策として、今からきちんと制度化してもらわないと、結局、大切な世界遺産が守れないことになるのではないかと懸念しています。しかし、世界遺産になっているということは、守るべき義務があるんです。これだから、冠は大きいなと思います。登録されているということは、守る義務があるので、恐らく、放りっぱなしにはされないだろうと思っています。



図4-26 移住者が棚田で米作り

それから、救急・緊急対応。こういうことを始めてくれました。5カ国語で、24時間対応の仕組みをつくってくれています。

このように、まち中に観光というものが広がりつつあります。まだまだ、全部が全部ではありませんけれども、最初は、外国人を熊野古道に呼び込もうということで始めたことなんですけれども、だんだんだんだん広がりを持って、今では、まち全体が観光に携わっているというような感じが醸成されてきました。

私たちは、田辺市の団体ですけれども、紀伊半島全域をカバーするような観光をやるぞという意気込みを示したポスターです。今日の皆様の袋の中にも、このファイルとマウスパッドを入れていただきました。ぜひ、いつの日か、一度、熊野古道を歩きにお越しただけたらと思います。その際は、熊野ツーリズムビューローにご一報ください。きちんとプランします。本日はどうもありがとうございました。

## パネルディスカッション



### ○横張



皆様、こんにちは。本日は、お休みのところを、かくも大勢の皆様にお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。

今から半年ほど前でしょうか、つくば市のほうから、このシンポジウムをやりたいと。ついては、どなたか、ぜひ、来てもらう方を推薦してくれないかというお話をいただきまして、私、即座に、それはもう川手先生と多田さんのお2人に、ぜひご登壇いただくべきだということを申しました。いろいろお忙しかったり、難しかったりする中を、本日お越しいただいたわけでございますけれども、もういまさら、私が言うまでもなく、大変に充実した話題提供を、お二人からいただきました。私、最前列に座っておいりましたので、皆さんがどういうふうに聞かれているか、振り返って見ることはなかったんですけども、大学で教鞭をとっておりますと、会場の

熱気というのは何となく感じるようになるものでございまして、私の背後から、皆さんが非常に熱心に聞いていらっしゃるというのがひしひしと伝わってくる、既にそうした会になっているなというふうに思っている次第でございます。

その熱気をなるべく切らさないように、このパネルディスカッションを、これから始めてまいりたいと思いますが、時間にしまして、おおよそ1時間弱になります。きょう、ご登壇の皆様、先ほど、川手先生のお話の中にも、私にも言わせろという人が出てくるのが大事だということがありましたが、まさに、私にも言わせろという方がお揃いですので、いろいろな話題を提供いただけると思います。同時に、皆様方からも、いろいろなご質問、あるいはご意見等も賜われるような、そういう時間を取りたいと思っております。これから、大体4、50分ですか、我々のほうでまずは話を進めさせていただきまして、その後に、皆様方より、ご質問、ご意見等をお受けしたいと思っておりますので、ぜひ、活発なご議論をお願いしたいと存じます。

## つくばにはどのような景観資源があるか それはどのように磨けば光るものなのか

### ○横張

それではまず、私、本日のこのパネルディスカッションに際しまして、ご登壇のパネリストの皆様方にお題を二つお願いしました。第1のお題は、つくばの景観資源、景観資源というのは、ハードだけではなく、ソフトも含めた景観資源として、一体どういうポテンシャルがあるのかと。ポテンシャルというのは、現状において、非常にすばらしいものもあるでしょうし、あるいは磨けば光るといふタイプのものもあるかもしれません。そうした景観資源として、一体何があるんだろうということについて、皆様方に何かお考えを持ってきてくださいという旨をお伝えしてございます。ですので、この話から、まずは皆様方のご意見等を拝聴できればと思います。この並びの順に、皆さんに伺ってまいろうと思っておりますが、実は、多田さんに関しましては、昨日、1日早くつくばに来ていただきまして、つくばの市内、学園地区から筑波山のほうまで、雨の降る中でございましたので、ざっとではございましたけれども、ご案内を差し上げました。そのご経験も含めて、今のお題に対して、もしお考えがあればと思いますが、いかがでしょうか。

### ○多田



二つあります。一つは、やはり筑波山なんです。私は、すごく山の多いところから来て、こんな平野は見たことがなくて、周りに山がないっていうのがもう驚きでした。山がないと、何か非常に不安なんです。昨日は雨で、筑波山が見えなかったんです。

今朝はすごくいいお天気で、ホテルから筑波山が見えたんですけれども、何て言うんでしょうか、筑波山は景色もさることながら、何か精神的な支柱となるような感じがしました。きっと、市民の皆さんも、そんなふうに筑波山を見ているのではないかなと思います。ですので、長い歴史で、暮らしている皆さんが筑波山に対して思っている思いみたいなものも、何か景観資源として、精神の支柱みたいな、そういう位置づけがされるといいなというのが一つ。

それからもう一つは、昨日、あちこちと連れ回っていただいて、実はつくば市じゃないらしいんですけども、八郷の集落、すごくきれいだなあと思いました。少し上のほうから、雨が上がって霧が晴れた隙間から見たんですけれども、あれは本当に残しておきたい日本の風景百選の中に入ると思います。その二つが非常に印象に残りました。

### ○横張

どうもありがとうございます。

八郷に関しましては、ご存じのとおり、行政界からすればつくば市の外なんですけれども、筑波山の観光資源という観点から考えれば、当然、峰の上から見下ろせる景観でございます。それを行政界からして違うところなんだからという、そういうせこいことは言っちゃいけないよと、そういう意味も込めてのご指摘ではなかったかと思っております。どうもありがとうございます。

では、吉原様、もしもよろしければ、多少の自己紹介も兼ねて、話題提供お願いできればと思うんですが、いかがでしょうか。

### ○吉原



ご紹介いただきました吉原と申します。私はつく

ば市で観光ガイドをやっておりまして、我々のグループは40人ぐらいいるんですが、年間140日ぐらい活動しています。主に筑波山神社が中心なんですけれども、つくば市内はどこでもご案内いたしますので、ぜひ、コンベンション協会のほうに申し込んでいただければ、いつでも対応します。

今回、景観資源がどのようなものがあるか、また、その中で、隠れている部分がどのぐらいあるかというのを横張先生から受けたんですが、皆さんに配られているこの「つくばの景観100」、代表的なものは、ほとんどこれに尽きるのかもわかりません。ただ、我々、観光ガイドをやっていて、景観にプラスして見るのは、一昨年、ジオパークが認定されましたけれども、ジオパーク的な考えを踏まえて景観を見ると、より一層深くなるかなと。

例えば川手先生のスライドにも桜川の写真が出ていました。この中にも桜川の写真が出ていますけれども、実は桜川は、皆さんもご存じのように、今から2万年から2万5,000年前は鬼怒川だったわけです。桜川は非常に川幅が広いです。現在でも、君島橋からちょっと入ったところに、関東平野がまだ海だった時代、12万年前の貝化石層が残っています。もちろん桜川の景観もいいのですが、そういうふうな見方をすることによって、また見え方が変わってくるんじゃないかなと。桜川は、実のことをいうと、途中から流れが変わって、今から2万年から2万5,000年前は鬼怒川だったんですが、その後、小貝川に移って、今から6,000年前ぐらいに現在の場所に変わっているわけですが、平らだったわけですよ、その当時は。ですから、そういう面がすごく見えるんじゃないかなと。

現在、筑波山梅林、大変な混み具合です。実は、あそこは調べてみれば谷でした。V字谷だったんです。今から1万年か2万年前だと思われませんが、男体山のほうからの土石流が4、5回流れてきた場所です。したがって、斑レイ岩という大きな石がゴロゴロしています。通称つくば石といって庭石に使っていますが、そこに梅の木を植えていったんですけれども、その筑波山梅林の景観を見るだけでも、最大のジオサイトなんです。したがって、何でこんなところに、小屋ぐらいの大きな石がゴロゴロしているんだろうと。あそこは、あんな斑レイ岩があるわ

けありません。あそこを掘れば下は全部花崗岩です。したがって、花崗岩の岩壁も隣にあるんですけども、景観にジオ的要素の見方を入れることによって、より深まるということが言えるんじゃないかなと。私はそういうのを感じました。

#### ○横張

どうもありがとうございます。

景観といったときに、ただ、今、目の前に見えているものそのものというよりは、むしろ読み解いていくべきものなんだと。今のジオパーク、あるいはジオサイトとしての見方というのは、まさに、ある種のリテラシーを持って読み解いていく、その先に見えてくる景観を考えることも大事なんじゃないかというご指摘であったかと思います。最近流行りのテレビからいうと、ブラタモリなどは、まさにそこに着目した番組じゃないかと思いますが、そうした観点から景観を考えるということも大事なんじゃないか、そういうご指摘であったのではないかと思います。

#### ○吉原

横張先生、ちょっと一言だけ。横張先生は造園学会の会長をやられているんですけれども、実は筑波山梅林は、日本で唯一の造園学会賞を取ったところです。これはもう筑波山梅林しかありませんでした。

#### ○横張

どうもありがとうございます。

2015年ですね。私どもの学会で、受賞対象をというふうにさせていただいたのが筑波山梅林でございました。どうも、学会のPRをしていただきまして、ありがとうございます。

それでは、次に、雨宮先生にお願いしたいと思います。

## ○雨宮



横張先生から宿題をいただきましたのは、そもそもどんな景観資源があるのか、それはどういうふうに磨けば光るのかということですが、私からは二つお話をさせていただきたいと思います。

景観資源として、一般的に認知されがちなのは筑波山ですが、ここで筑波山というふうに答えると、ちょっとひねりが無いというふうに思われそうなので、少し変化球というか、一般的には気づかれていないところを指摘したいと思います。実は、つくばというのは、都市と筑波山の間にもかなり景観資源があるのだということを、川手先生と、このバスルートマップ（図5-1）をつくる過程の中で気づくことができました。

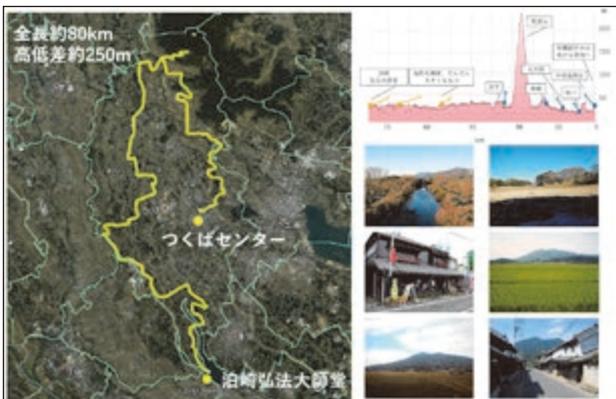


図5-1 バスルートマップ

それは、平地林であったり、谷津田であったりという、そこに住んでいる方々からすれば、日々の生活の結果できていった風景であって、美しい風景をつくらうとしてつくってきた風景ではないのですが、そういうところも川手先生と一緒に歩いていくと、ああ、ここいいねという場所がたくさんありました。

ただ、こういう都市と筑波山の間にある景観資源というのは、あまり知られていません。私は、学生

に、つくばの認知地図というのを描かせる授業をやっています。認知地図は、頭の中にあるつくばのイメージを地図に描いてくださいと言うものですが、そうすると、学園都市が描かれるんですが、その周りには筑波山が描かれて、それで終わりなんです。その間に何も無い、空白地帯が生まれています。

ですから、これを磨くためには、まず、そういう景観資源があるということを知るとというのが非常に大事なことで、例えば、こういうルートを川手先生と一緒に提案させていただいたんですけども、知る機会を、こういうルートみたいな形を通じて提供していくということが、まずやれることなんだと思います。

二つ目の景観資源ということで強調したいのは、これはイーアスの前で、さっき撮ってきた写真なんですけれども（図5-2）、ジオパークとサイエンスシティつくば、二つののぼりが立っています。先ほど私が申し上げた、人が自然と対話しながらつくり上げていった風景というのは、ジオパークのコンセプトと相性が良いと思うんですけども、一方で、つくばは研究学園都市があります。研究学園都市もまた景観資源としてみなすべきなのではないかと思っています。

つくばに研究学園都市ができてから、50年ぐらいがたちます。世界を見てみますと、当初世界的な都市計画の考え方でつくられてきた都市が遺産としてみなされるという時代になってきています。つくばも遠からずそういうふうになっていく可能性があるんで、研究学園都市がつくってきた景観というのも景観資源として見直していく必要があるのではないかなと思います。



図5-2 フラッグ

それをどう磨くかということなんですけれども、これもやはりまずは知ることが大切だと思います。研究学園都市については、当初、川手先生なども含めて、当時の公団の方とか、たくさんの方が、どういう風景の見せ方をするのかということ非常によく検討されていたんですけれども、そのことというのは、必ずしも引き継がれていません。二つ、次に写真が出てきますので、それを使ってご紹介したいと思います。

これつくばセンターの写真なんですけれども、自家用車の一時駐車場を上から撮ったところです（図5-3）。遠くに見える橋がアーチになっているんです。これが車椅子とか通るのに大変なのに、何で、こんな曲がってるの？というふうに思うかもしれません。これについて最初の計画の意図を見てみると、こういうふうに曲げることによって、筑波山をよく見せるようにという意図があったみたいなんです。ただ、その向こう側にビルが今、建っています。そのビルがまさに筑波山と重なる位置で、その橋から、本当は筑波山を見せるために、わざわざ橋を曲げているにもかかわらず、その筑波山を妨げる位置にこのビルが建っているという状況があります。こういったことを見ると、当初の計画の考え方というのは、ちゃんと見直すことが必要なのだと思うわけです。



図5-3 つくばセンター

次、これは街路樹です（図5-4）。一見、何の変哲もない街路樹なんですけれども、つくばには、特徴的なシラカシの街路樹というのが植えられています。これも、絵として見ると、ただの街路樹なんですけれども、何でシラカシが植わっているのかということ計画文書を紐解いて見ていきますと、これはいろいろあった計画の中のの一つなんですけれども、緑化計画に関する研究ということで、1970年代につくられたものです。この計画（図5-5）は千葉大学の園芸学の先生方が中心になってつくられたものなんですけれども、筑波研究学園都市の中の街路樹に、どこに、どれぐらいのボリュームで、どういう樹種を植えた方がいいのかということはかなり入念に研究されていまして、成長したときに、風景として、どういうものを見せるのかということを検討されていたわけです。



図5-4 筑波研究学園都市の街路樹



図5-5 緑化に関する研究

これはほんの一例で、緑地に関する研究だけでも相当な数の報告書があって、実は、それは市に保存されているらしいんですけども、ある1部屋があって、そこにほぼ死蔵のような形で保存されていると伺っていて、公開になる機会は必ずしも多くないということです。まずはこういった先人の考え方をきちんと見直すということが、景観資源として生かすということで、一つ必要なことなのではないかなと思っています。

### ○横張

どうもありがとうございました。

学園都市の周囲の景観、それから、学園都市の中の景観、どちらに関しても、知ると。まずは景観の成り立ちであるとか、あるいはその背後にどういう先人の思いがあったのかとか、こういったことを知る、読み解く。ですから、そういった意味では、先ほどの吉原さんと同じような観点も含んでいるかとは思いますが、そこが景観を考えていく上では、大変大事なんだということをご指摘なされたのではないかと思います。

ちなみに、先ほどございました学園都市の緑化に関しましては、私の大学時代の恩師、それから、そのまた恩師。1960年代の半ばぐらいから、大変綿密な調査が重ねられておりました、その調査に基づいて、学園都市の、こうした街路樹の植栽等も樹種が決められていると。それこそ、私が学生のときの定期試験の試験問題にそれが出たのを今でも記憶しております。それぐらいの、いわばノウハウが詰まる中において、実はこのシラカシというのが選択さ

れている。その辺を知らずに事を進めるといっはいかかなものかというようなご指摘であったんではないかと思ひます。どうもありがとうございました。

それでは、最後になってしまいました。すみません、上野さん、お願いします。できましたら、ご自身の自己紹介も兼ねていただいて結構でございますので。

### ○上野



上野弥智代と申します。里山建築研究所で仕事をしています。里山建築というのは、里山で木を切って、それを組んで、板や土で壁をつくって、草で屋根をふいてという、身近な素材で、職人さんがつくり上げてきた人の営みそのものも含めて住まいづくりを考えていきたいということで、里山建築と言っています。私は民家を研究している研究室の出身なんですけれども、私も、景観資源としてどんなものがあるかということで挙げさせていただくのは、筑波山麓の里山です。今回は、里山資源についてお話ししたいと思います。

筑波山麓の里山にどんなものがあるか。左上(図5-6左上)が先ほどおっしゃいました八郷の民家ですけれども、茅葺き民家です。右の二つ(図5-6右)は、キリトビと言われる日本でも独特な、技巧的に発達した棟仕舞の装飾が見られます。非常に世界の人も驚くような屋根がここにはあります。

そして、私の仕事場があるのは、この里山につながる北条ですが、北条には歴史的な町並みがあります(図5-6左下)。先程文化的景観の話がありましたけれども、こういう民家というのは、民家を見ればその背後にある里山がわかります。特に茅葺きは、その形、材料に何を使っているかを見れば、どの地域の茅葺きかわかるくらいです。日本は地域的

に多様に発達しているのです、そういうものの一つがここにつくばの形としてある。この民家っていうものが里山をあらわしているし、里山は民家をつくっているということがいえると思うんですけども、これが大きな資源じゃないかなと考えています。



図5-6 筑波山麓の里山景観

次に、今、空き家が課題にあります。左上(図5-7左上)にありますのが、大正時代に建てられた民家ですが、空き家になって何十年もたって傷んだ茅葺き民家というのが山麓にありました。これを都市の人が、新たに買い求めて、直して、地域に開いた週末住宅、コミュニティの場所として再生された事例です。



図5-7 蘇る民家

民家を直すということは、先程お話ししたように、茅葺き屋根を見るとわかるんですが、この地域の竹を切って、茅を刈って、この茅刈りは、高エネ研でやっている茅刈りの様子ですけども(図5-8)、ススキです。それで、左下のように屋根をふいて、

建物をつくるという、素材と技が、見ただけでわかる。この場合、この屋根一つつくるのに、竹はおおよそ700本から、小さいものも入れると1,000本近く使っていますし、茅は120段という、1段6把なのですが、約1.2町歩ぐらいの茅場からとれた茅を、1軒の屋根をふくために使いました。こういう民家というのは、たくさんの資源を使いますので、里山は手入れされないと、どんどん変わっていくと思うんですけども、こうやって手入れされて、使われて、民家にも、映し出されています。民家を直せば里山がよみがえるというのはそういう意味で、営みと切り離された歴史的価値があるのが民家ということじゃなく、その営みそのものがここにあるということが大事なんじゃないかなと思っています。



図5-8 民家を直せば里山が蘇る

私たちも関わって、幾つか、よみがえった民家があります(図5-9)。梅林のあずまやは、新しく茅葺きでつくったものです。

左下は、六所というところで、近くの人が家を手放すというので、移築して、茅葺き小屋として、今、グリーンツーリズムの拠点として使っているもの。

それから右下は、先ほどご紹介した六所の家、右上が、上筑波の神社とほぼ並びに東山というところがあるんですけども、そこで、やはり空き家になっていた茅葺き民家を新たに譲り受けた人が茅葺きに再生して、これ、鉄板をかぶっていたんですけども、それをはがして再生しました。ポツポツと筑波山に赤丸をつけたのは、これらの家のあるところ です。



図5-9 筑波山麓の蘇る民家

これをつくったはいいけれども、使わないと。民家は、座敷で結婚式をしたり、お葬式をしたり、それから、寄り合いをしたり、公民館的な役割もありますし、集会所でもあるし、それから、土間は作業する仕事場でもあるし、そういった民家のもともと持っていた懐の深さを体験することで、まずは知るとのこと。いろいろ農業体験や、かまどのご飯や、暮らしの手仕事を体験する。しめ縄づくりは、田んぼでそのための稲を育ててしめ縄をつくるころまでやっています。民家を使うことで、そこを知り、里山を知り、また、中には移住するという人もそこから出てくるというような使い方を今やろうとしています（図5-10）。



図5-10 みんなで使うみんなの家

これ（図5-11）は北条の町並みです。もともと歴史的な町並みが広がっているところですが、左上が、呉服屋さんをまちづくりの拠点にしているところ。その右は、古い郵便局をカフェにしているところ。それからその下が、3月4日にオープンした

呉服屋さんをおうどん屋さんにしたお店。私たちの事務所は、実はこのうどん屋さんの後ろの主屋なので、この一帯が随分活気が出てきたなって言っています。ついこの間は、うどん屋さんが臨時休業したときに、うどん屋さん休んでいるんだけど、大丈夫かな、体調悪いのかなと近所の人が出てきて、はや2週間でコミュニティの中にもうどん屋さんも馴染んだんだなと思ったり。今、そんな活動をしていて、民家というものを生かす取り組みをしようとしています。



図5-11 歴史的まちなみを生かす

### ○横張

どうもありがとうございます。

民家を事例にとっていただきながら、人が使い込んでいると、あるいは営みの結果としてできている、そうした景観というのが、なかなか住んでいる方には気づきづらい点もあるけれども、実は非常に魅力的な景観資源、あるいは場合によっては観光資源になり得ると。しかし、やはりそれは、今、ご自身がやられているような活動を通じて、住民の方と一緒に、やはり知るとということが非常に大事なんだというご指摘であったのではないかと思います。

## 景観資源を磨き生かしていく上で 阻害要因となるものは何か

### ○横張

ということで、一巡いたしましたして、4名の方々に、それぞれの観点から、どういう景観のポテンシャルがあり得るのかということをご指摘いただいたわけですが、二巡目のお題として皆さんにお願いしたのが、せっかく、そういう景観のポテンシャルがある、すばらしいものがあるにもかかわらず、それが生きていない、あるいは何がしかの理由で、それが阻害されてしまっていると。とするならば、一体、そこには何があるんだろうかと。一体、何が、せっかくのその景観のポテンシャルが伸びるのを阻害してしまっているんだろうか。これもまた、ハード的な面もあるでしょうし、ソフト的な面もあると思います。そうした、ハード、ソフト両側面の中から、阻害要因として何があるのか、それをご指摘いただけませんかというお題を、事前に出しておりますので、次は、これに関して、また、各方の皆さんにそれぞれのご見解をというふうに思っております。また、多田さんから、よろしいでしょうか。

### ○多田

私が昨日ご案内していただいて、一番残念だったのが筑波神社と筑波神社の周辺でした。神社は、まず、神社の縁起を書いている案内板とかがないんです。神社の中には碑がやたらと多くて、何か、あんまり配列が考えずに次々と設置されたみたいな感じだったのが残念です。すごく立派な神社で、山門を見てびっくりしました。でも、そこはちょっと残念でした。

それと、神社に至るまでのアプローチですよ。だんだん、だんだん気持ちを高めて神社に到達したいんですけども、だんだん、だんだんがっかりしながら、神社にたどりつくんです。というのは、これは日本の観光地のどこもそうだと思うんですけども、結構、乱雑に看板があったり、あまり景観というものを意識しなかったのが日本の歴史ですよ。では、今の時代はどうかというと、どんどん洗

練されていっていますから、やはりデザインする。まちも、それから、看板だけではなく、周辺全部をデザインするという感覚が必要なんじゃないかなと、そんなふうに感じました。

### ○横張

どうもありがとうございます。

私も、昨日、筑波山神社をご案内いたしました、言われてみれば確かにと思ったのですが、縁起を書いた、一体どういうここは神社なのかということ解説する板が、どうも見当たらないんです。言われてみれば確かに何もありませんという話をしたり、それから、いろいろな石碑、いろいろな記念碑とかが境内にあるんですが、どうも、何か適当にすき間に置きちゃった、みたいな感じです。そこに統一感が見られないとか、さらに、今おっしゃったように、神社に至る参道に関しましても、看板が乱雑であってみたいり、今ひとつ、トータルとしてのデザインがないと。ですから、神社の中も外も、全体として、どうデザインするんだという、そのコンセプトなり、統一性なりがない中で、場当たりの、それぞれのもがそれぞれに置かれているといったあたりが大変に残念であるといった、そうしたご指摘であったんではないかというふうに思う次第でございます。

それでは、吉原さん、お願いします。

### ○吉原

私は観光ガイドをやっている立場から申し上げるんですけども、実際に、観光資源が生かされていないんじゃないかというふうなことがあろうかと思えます。観光をやる場合には、ハード面とソフト面があって、ソフト面はおもてなしの心を持って、お客様の立場に立ってご案内する、または来ていただく対策をすることが必要なんだろうと思えます。ハード面の対策は、私は、清潔で、温かみのある景観対策が必要かなと思います。お客様にとって清潔で、温かみのある景観です。

実は景観 100 につくば公園通りってあるんですけども、つくば公園通りは、お客さんをご案内するとき非常に評判がいいんです。信号が一つありませんから。松見公園から、洞峰公園を歩いていく

んですけども、お客さんからは、こんな公園があったんだ、うらやましい、という言われ方をします。

筑波山は、登山客が多くて、年間 200 万人以上、220 万人ぐらい来られます。一時は 300 万人いましたが、今はちょっと減っています。減っていますが、土日祝日は、つくば駅から筑波山神社に行くバスはラッシュアワー並みです。本当にびっくりするくらい。天候のいいときは、登山客が絶えることがありません。しかし、ここに対策ができていない、または用意すべきだということもあります。

清潔で、温かみのある対策というのは、一つは安全です。歩道が必要です。車道と歩道が一緒になって、今、運用していますけれども、歩道は、研究学園都市のほうは完全にできていますが、古いところはできておりません。お客さんにとって一番困るのはけがをしたときです。したがって、安全ということを、歩道ということを、第一優先に考えるべきではないかなと。

それと、もう一つは、景観の中で、やはり清潔さです。すなわち壊れた家があちこちにあたりすれば、これは印象悪くします。したがって、壊れた家の場合には何らかの対策を講じるとか、何かそういうふうなものをやる必要があるのかなということですね。

温かみのある対策というのは、私にとっては安全対策であるし、清潔さという面においては、家とか道路、または橋、川。実は川は、男女川という上から流れている川もあるんですが、はっきり言って、途中、ごみの川になっています、あれだけ有名な川が。そういう面では、やはり景観対策をやっていたら必要が出てくるかなと。それによって、より、お客さんがたくさん、いい印象を持って、つくば市の景観の魅力度がよりアップするんじゃないかなというふうに常々思っています。

#### ○横張

どうもありがとうございます。

清潔で、温かみのあるという二つのキーワードをいただきました。清潔ということに関しましては、例えば廃屋の問題がそうであり、あるいは川の汚染の問題がそうであり、そうした、いわばマイナス、これをいかに除却していくのかということが一つ

のポイントではないかというご指摘、それからまた、温かみというのは読みかえると安全ということであり、例えば歩道がきちんと整備される中で、せっかく訪れた方がけがされるようなことのない、そういう環境をつくっていくべきであろう、そうしたご指摘であったかというふうに思います。どうもありがとうございます。

それでは、雨宮先生、お願いします。

#### ○雨宮

ここでは、阻害要因になるものは何か、それを取り除くためにどうしたらいいのか、ハード、ソフト問わずということだったので、先ほどハードのお話を結構されたと思うので、私はソフトの話をしりたいと思います。やはり人の問題はかなり大きいと思います。野立看板とか、広告が出てしまうとか、それを許容してしまうとか、それを撤去できないとか、かなり人の問題は大きいとっていて、先ほどから何度も出ていますけれども、景観というのは背後にある道理を読む力みたいなものを求められるので、それを磨いていくことが必要なんじゃないかなと思っています。

川手先生と、私、共同でスライドをつくらせていただいたんですけども、皆さん、読み飛ばしてしまったりかもしれないんですが、川手先生は、景観を「感得する」という言葉が使われています。感じるに得で、感得。景観を「感得する」って、普通、言わないですね。私もこの感得するという言葉をほとんど使わないので、辞書で調べますと、「奥深い道徳や真理など、感じ、悟ること」というふうに書いてありました。これは非常に学のある言葉だなと思いました。昔、横張先生から、景観というのは見るのではなくて読むものだということを教わったときにも感銘を受けたんですけども、今回、感得するという、その背後に含まれている真理とか、原理みたいなものを含めて、そのよさというのを感じ、悟ることだということに使われていたのが驚いたのです。しかし、景観を感得する能力を持つというのは、かなり難しいことだと思います。何も予備知識もなしに現場に行っても、何となく、きれいな風景だなで終わりで、きれいさとか、美しさに気づけないということだと思えます。それを感得する力と

いうのを、どうやって育てていったらいいのか。一つは、人間が、市民が勉強して知識をしっかりと身につけるといことだと思えるのですが、それだけに頼っているのではなくて、先ほど多田さんのお話にもあったように、筑波山というところに行ったときに、その筑波山の景観というのは、どういう成り立ちで、そこにそういう形として存在しているのかということですか、ここで、写真で示されているような、何気ない風景（図5-12）ですね、何気ない風景というのは、どういう力が作用して、どういう社会の中で、どういう人たちがどう生きてきたことの反映として、今、こういうふうな形で目の前に存在しているのかとか、そういったことを現地で解説する、多田さんのお話の中であった語り部みたいなことも有効だと思いますし、筑波山神社のようなところでは、説明のための看板みたいなものも有効なんじゃないかなというふうにも思っています。



図5-12 何気ない風景

### ○横張

どうもありがとうございます。

感得という言葉は私も全く、これまで使ったことがない言葉でございましたけれども、奥深い道徳や、真理を感じ、そしてまた悟ると。まさに、そうですね、背後にあるものをリテラシーを持って読み解いていくのは、そうした力、これがやはり備わることが大変大事なんだと。ただ、見るものじゃないというご指摘であったのではないかなというふうにも思います。どうもありがとうございます。

では、最後に、上野さん、お願いします。

### ○上野

私は二つ考えたんですが、一つは、やはりバラバラということがあると思っています。茅葺き民家は、茅葺きを持っている人たちのためだけでしょ、私たちは関係ない、何かやろうとすると、ブツブツブツブツ切れちゃっている。暮らしとも民家は切れているところもあるので、ここが途切れてしまっているというのが非常にもったいないと思っています。

もう一つは、職人の技です。職人の技も、今度、伝統的な木造建築技術というのが世界遺産に提案されようとしていますけれども、その14種の中に、大工や茅葺きも入っているのですが、その技は世界とも交流できるものであると。日本独自に発達してきたものは、世界に誇れる技術であって、暮らしの技は交流できる技なんじゃないかなと思っています。ただ、技だと技だけ、古民家だと古民家だけ、町並みだと町並みだけっていうブツブツ感が、何かうまくいかないなというふうにも思います。

さらに、私は建築設計の立場から、そういう歴史的な建築物を活用するに当たっては、現行の建築基準に合わないということで、うまくいかないということが出てくる、そういう制度上の問題があると思います。昨日、歴史的建築物を活用するための条例整備のガイドラインが国交省からちょうど出たばかりのようですけれども、そういったものも活用したくても、どこに、誰に言ったらいいかわからない。つくばには民家が900何棟あるという、ストックが豊富なところで、茨城県の中でも、つくば市が牽引していけるような、そういうことがあると思うので、こういう条例整備についても考えられればいいなと思います。

### ○横張

どうもありがとうございます。

一つはバラバラであるというポイント、例えば、古民家の話に対しましても、その古民家を成り立たせるさまざまな暮らしの技から、その古民家、さらには町並みというところにつなげて考えていくようなことがなかなかされない。特にそれが制度という面において、さまざまな障害になってしまっているケースがあると、そういったご指摘であったかというふうにも思います。どうもありがとうございました。

## 質疑応答

### ○横張

さて、事前にお題を二つ皆様にお願したことにつきましては、以上で二巡した形になるんですが、残り時間、あともう 15 分ほどでございますので、ここで、フロアの皆さんから、ご質問とか、ご意見を頂戴したいと思います。本日、大変に多くの話題があって、なかなか考えがまとまらないというふうな思いのところもあるかもしれませんが、ぜひ、さまざまなご意見、ご質問頂戴したいと思いますので、お願いしたいと。いかがでしょうか。

### ○質問者 1

2点ほど。先ほど雨宮さんがおっしゃいましたが、筑波研究学園都市の現実と、その後のことの問題で、学園都市をつくる時に、建物の高さを幾ら以下、それから、学園都市の中につくる研究機関は塀をつくってはいけないというふうな原則があって、多分それに従ってほぼできて、建物の高さも相当に制限的なところがあった。ところが、学園都市がいよいよ完成してくると、次々と高い建物ができちゃって、それはもう景観がずいぶんと変わったんです。それと、今日、いろいろな事情で、公務員宿舎が取り壊されて、そこの植栽は、ほとんど無くなってしまいました。これは重大な景観の変更です。変更というより、もうこうならざるを得ないから、今後どうなるかということについては、もう推して知るべしであるけれども、新しい景観に変わっていくだろうというふうに、もう、これはやむなしと思わざるを得ません。

もう1点あるのは、十数年前から、松林がもうほとんど根絶やしになって、多分、これによって、つくばの景観は、またニーズが変われば変わらと思う。今日、論じている程度において、何ていうか、その先を見て論じていかないと、失敗するところだろうと思うわけです。

それから、多田さんが、さっき、筑波山のことをおっしゃっていましたが、日本風景論でいうと、筑波山ごときは山ではないと。お寺というふうにあります。

### ○横張

どうもありがとうございます。

それでは、まず雨宮先生、いかがでしょうか、ただいまのご質疑に関しまして。

### ○雨宮

いただいたコメントについては、非常に同感のところもあるんですけども、最後の、先を見越してちゃんと手を打つ必要があるというような話は非常に同感なところがあって、現状、やはり公務員宿舎の廃止の後、高層マンションが建つてというところを見て、皮肉にも、そういう高層マンションが緑豊かな住環境というのを宣伝文句にしているという状況なんかを見ていますと、本当に将来的に、どういうふうな町にしたいのかというのは、やはりちゃんと考えておく必要があると思います。

川手先生のお話の中で、バックキャストというか、理想を語ることが必要だというお話がありました。行政職員は理想を語ることが必要であり、最終的には折衷案で落ち着いていくんだから、理想を語って、理想的なプランというのはつくらなくちゃいけないということがあったと思うんですけども、私もそれについて、同感です。結局、つくばはどういうまちを目指すのか、ちゃんと理想をつくって、それで、バックキャストで、今、起こっていることをしっかり評価をしていかななくちゃいけないんじゃないかなと思っています。

### ○横張

どうもありがとうございます。

さて、他にいかがでしょうか、ぜひお願いします。

### ○質問者 2

つくば市景観計画を考えていくと、本当に夢が膨らむんですが、でも、ちょっとそこで疑問が出てきまして、例えば景観形成重点地区の地区計画指定区域などに当たったとしますね。そうすると、まちづくり協議会を立ち上げて、条例をつくったりとか、もうすぐく夢をいっぱい入れながら考えるわけですけども、現実には、そういうポリシーに反するような行為があったときに、どこが主体的に指導なり、罰則っていうこともあるかもしれませんが、そうい

うことをするのでしょうか。その辺が曖昧模糊としているんですが、教えてください。

#### ○横張

どうもありがとうございます。  
では、長島部長。

#### ○長島

都市計画部の長島です。制度は、様々あるんですけども、例えば地域の人たちが地域で守りたい景観、これをつくるというときに、手法として、一つ、「景観協定」というのがつくれます。その地域の人が、自分たちのルールをつくるということになりますので、市役所などが規制をかけてコントロールするというものではなくなります。そして、地域でのルールに違反したときはどうします、というルールをつくることはできます。例えば勧告とか、そういう計画はやめてくださいと言ったりとか。そういうことは、その地域のルールとしてつくることができるというものがございます。

#### ○質問者 2

でも、それってとても難しいことですよ。行政は何らタッチしないというわけですね、それでは。

#### ○長島

地域でつくったルールには行政は入り込めないということになります。ただ、行政が入れるルールとして、「地区計画」という細かいルールを定めると、それは行政がきちっと指導できます。

#### ○横張

どうもありがとうございます。  
では、他にいかがでしょうか。

#### ○質問者 3

今日は、どうも貴重なお話ありがとうございます。

一つ、私、疑問に思っていることがあるんですが、私、つくばに来て 26 年目なんですけれども、外国の人はわからないけれども、県外の方は、つくば市、それから、茨城県に来ると、特に車なんかで来た人

はそうなんですけれども、案内板の表示が非常に少ないから、運転していても、よくわからないという声が多いんですよ。それは、今、ナビゲーターが発達しているし、それから、景観を損なわない、観光資源だけじゃなくて、せっかくの景観を損なわないという目的もあるんでしょうけれども、それは道路ですと、公安委員会のほうの問題なのかもしれませんが、具体的にいうと、例えば市役所とか、病院とか、公園とか、消防署、高速道路の出入り口、その他もろもろ。要するに、あんまりサービスがよくないという声が多量に多いんですが、これから、電柱なんかをどんどん撤去していきますから、そういう案内板を立てるところも減ってくるんだらうと思うんですけども、それをどうやって確保するかということと、案内板は、やはり日本語だけでなく、英語だとか、ほかの国際語も使ってやるべきじゃないかなというふうには思っているんですけども、その辺のつくば市の、これからのまちづくりの考えを教えてください。

#### ○横張

どうもありがとうございます。

これはどなたに伺いましょうか。例えば、多田さん、熊野古道のご経験の中で、先ほどご発表の中でも案内板の話に言及されていたらっしゃいましたけれども、当然、今のようなご指摘というの中にはあったんじゃないかと思うんですけども、その辺はいかがだったでしょうか。

#### ○多田

確かに熊野古道も、熊野古道はだんだん整備されましたが、下町は本当に看板が少ないんですよ。というのは、町っていうのは、自分たちが暮らす場で、外から人が来るということがあまり想定されていないんです。地元の者しかわからない、何とか通りを右に曲がってとか言うんですけども、何とか通りなんて、どこにも出ていないんですよ。外から訪れる人の町ではないですね、今まで。ですので、もう少し外から来るということを想定した町の看板づくりというのは、特に市街地において大事じゃないかなというふうには思います。

それと、今後、看板は最低、英語ぐらいは併記し

てほしいです。何カ国語もすると、景観が壊れると思うんですけれども、せめて英語ぐらいはあったほうが、これからはふさわしいと思います。

#### ○横張

吉原さん、観光ガイドをふだんされていて、例えば看板に対しまして、今みたいなご指摘というのは、いかがでしょうか、ご経験になられていることはございますか。

#### ○吉原

私自身、つくば市内をよく知っているのですが、自分で教えちゃうという部分もあるのであれなんですけれども。確かに今、道路も本当、英語とかローマ字で標識が書いてあるので、そんなに不便という感じはちょっとしないのですが、今後、案内をやる時には、特に、今のフットパスコースなんか、実は筑波山地域、前川先生を中心にやってくれている部分があって、英語になっていないんですけれども、人が歩くところとか、そういうところは、やはり外国語表示は絶対必要でしょうね。案内板として、どの人々をターゲットにやるかというのはあると思うんです。

案内板がちょっと少ないと思っていたのですが、自分で教えているという部分もあったので。すみません。

#### ○横張

もう大分時間たってしまったのですが、先ほどご質問ございましたので、もう一つだけご質問をお受けしたいと思いますけれども。

#### ○質問者4

近くで私、区長をやっている、区会の区長なんですけれども、景観協定を区会で持っています。これ、しっかりやるとなると、結構いろいろ大変だったり、やりがいはあるんですけれども、しっかりやらないと、ムラができたりすると、不平等が出るとかで、これ結構大変だな、こういう景観のことを守るのはと思うんです。すみません、川手先生に質問してもよろしいですか。

#### ○横張

結構です、お願いします。

#### ○質問者4

市民参加とかのことをすごく思われていて、すごくありがたいお話なんですけれども、そうなる、市役所もすごく頑張らないといけないというのは、先生のお話とか聞いても、すごく思ったところなんです。

一方で、私みたいな世代、30代とか50代の方がまちづくりにかかわろうとすると、結構、それもまたアフター5とか、休日っていうところを使わなきゃいけない。そうすると、今、働き方改革と言われていの中で、市役所の職員って、どこまで付き合ってくれるだろう、みたいな、何かそういう感じも、少し今あるんです。

川手先生が、市民としての立場で、港北ニュータウンでいろいろなことを取り組まれていて、それで行政が変わっていった姿とかも、多分、都筑区のほうで見られていて、うまくいっていることと、うまくいっていないことと両方あると思うんですけれども、何かその中で、つくば市にヒントになるような、いいことでも、悪いことでもいいんですけれども、都筑区と市民とのつながりの事例をちょっと何か。

#### ○横張

どうもありがとうございます。

#### ○川手

私、ほとんど質問、聞こえていないんですよ。それで、隣りにいるのが一生懸命書いているもので、どういうことなのかわかんないんですけれども、私が今日一番言いたかったことを先に申しますと、いろいろご意見、今日出ていましたね。例えば公務員住宅がどんどん壊れされている話、景観が壊れている話、どうするかとかですね。それから、ポリシーの違う人が意見をおっしゃったときに、意見、ポリシーの違う開発者が出てきたときにどうするかとか、そういう種類のご質問があって、そういう質問を聞きながら、港北ニュータウンではどうすんだかな、というふうなことも考えたんですけれども、

非常に難しいんですが、大切なことは妥協点を見つけることなんです。

つまり、理想型の解決というのは、僕はあり得ないと思っていますですよ。だから、その案はだめ、じゃなくて、それをつくりたいという人の意欲がありますから、その意欲を生かしながら、こういうふうにするばいいよという案を周りの人が出せるような、話し合いの場をどうつくるかということがすごく重要で、その場をつくるときの、場づくりの任務が行政にあるんだけど、ポリシーの違う人があったら、自分たちだけで話し合っ、みんな規則で縛ることができるというふうなことを、ちょっと市が答えている気がしたんだ、間違っているかもしれませんが。その答え方は間違いで、周りの人が集まって、規則をつくって、だめだというんじゃないくて、みんなで妥協して、まあまあこの辺かということをとにかく求めて、次はこういうことでいこうねというふうな話し合いを議事録で残していくような、そういう仕組みといたしましうか、つまり、お互いに排除するんじゃないくて、お互いに許して生きていかなきゃなんないっていう時代にこれから入っていくという。そういうときに、排除ではなくて、そこに寄り集まってこようよという、そういうまちづくりの時代に入ったというのが、現在の日本都市計画学会の最大の目標なんだという意見が、もう今、多く出てきているのです。

私もそれに賛成で、要するに、理想がこれだから、理想に反するものは罰則で抑えていくというふうな、ものの考え方はやめて、とにかく、やりたいという人の意欲をみんなの人が盛り立てて、みんなが妥協できるようなところへお互いにやっいていこうよという、その仕組みをどうするのか。そのときに重要なことは、真っ先に勉強しなくちゃいけないのは行政なんだということ。

そうでないと、行政の人が必死で勉強していないと、住民同士の場合には、あいつとは意見が違うという種類になってくるんですよ。我々、実際には、行政があるからに、いろいろ助かっていますから。行政が考えていることというのは、何とか生かしながらやっいていこうという、文化をつくり上げているわけですよ。だから、その文化を担うだけの自覚が行政にあるのかということなんです。

行政は、住民参加として丸投げする癖があるんですよ。案は出さないです。それで、国からの補助金を出すからこれでやれと言うと。何となく案つくって、それを押しつけてくるという癖があるんですよ。そうではなくて、行政の人が今から必死で勉強し始めろという、僕は今、言っているんです。

それで、例えば、今の行政の人に向かって、公務員住宅が壊されて、汚くなっているじゃないかっていう意見のときに、今、行政、あなた、どう考えるかと。答えがほしいところですよ。急に言っても困りますから、何日かあげなくちゃいけないんだけど、私の考えでいえば、スクラップアンドビルドの時代は終わったと思うんです。もう壊すことはない。壊すのは次、建てるために壊すんですね。建てるという意欲のある人が出てくれば別ですけども。今のあるまをどう生かしていくのかということからスタートして、それを少し修繕するというときに、例えば研究学園地区でいえば、そのときのプランナーの皆さんは非常に努力していると。要するに、公団の3DKとか、型で押しつけられたのを、どういうふうに緑の中に埋め込もうかということに努力しているんです。それを壊して、まとめて、スクラップして、緑を増やせばいいんじゃないかという、そう単純なことが答えではないだろうと。多分、それをつくったときに、与えられた建物の間にいかに緑を配置すれば、少しでも良くなるという努力をした。そこを、さらに良くするためにどうするかという種類の議論をみんなでするような雰囲気は誰が出せるかということ、それはもう、空き家なんて人がいないんですから、すると、行政は応えなげないですよ。

行政は、何とか方針があるから方針に従ってと、ポーンと丸投げするようなやり方を変えるべきときが来ているという印象なんです。

#### ○質問者 4

ありがとうございます。

#### ○横張

どうもありがとうございます。

実は、今日の会、最後に一言、川手先生にお願い

したいと、私、申しましたら、川手先生、いやいや、もういいからおっしゃって、あなたがやりなよというふうにおっしゃっていたんですが、期せずして、最後に川手先生にビシッと締めていただきまして、私が申し上げたかったことも全部おっしゃっていただきました。

ということで、すみません、私の司会の不手際で、ちょっと時間を超過してしまいましたけれども、では、これをもちまして、本日のパネルディスカッション終了させていただきたいと思います。

最後まで、長い時間ご清聴いただきまして、ありがとうございました。

## まちづくり宣言



つくば市長

五十嵐 立青

今日は本当にありがとうございました。お話を拝聴し、思うところも非常にたくさんあり、とてもいいシンポジウムになったと思っています。冒頭、川手先生に「市長の覚悟が大事だ」と言われましたし、最後にも「行政が」、というお話をいただきましたので、私の感じたことや、今取り組んでいることなどをご紹介したいと思います。

川手先生から「感得」という言葉があり、大変感銘を受けました。本日配布された景観 100 のパンフレットを改めて見ていたのですが、あれは、12、3年前につくったものでしょうか、どのくらい変わってしまったかなと思って見たら、それほど大きくは変わっていませんでした。これは非常にうれしいことです。ただ、幾つか目立つところでは、気象台の鉄塔がなくなっていること、筑波山にソーラーパネルができてしまったという変化がありました。

感得という話と、雨宮先生のお話にもありました先人たちの思想という話を絡めて、つくば公園通りの話を少しします。つくば公園通りは、景観 100 のパンフレットに、赤塚公園と洞峰公園の間がとても素敵だと書いてあるのですが、そこに御影石の石畳がありました。しかし、歩きにくいという声が市に届き、それを受けてはがすことになってしまった。途中まではがされてしまったところで、事態に気づいた地域の方が、とんでもない、今、こんなすばらしい石はない、と石畳を守る運動をしたことで、700メートルだけ残ったのです。

実は私もこの運動に参加していて、そのときに知ったのですが、先人たちの思想という意味で、なぜその石畳に価値があるかということ、原点に立ち返って考える必要があったのです。どういうことか

というと、学園都市を設計した先人は、赤塚公園と洞峰公園を一体的に捉えていたのです。赤塚公園は静かに過ごす場所。洞峰公園はスポーツを中心に楽しく、活発に過ごす場所。静的な公園と動的な公園があり、それを石畳でつないで、一つの一体的な公園にしているという思想がそこにはありました。こういうことをトップが理解していれば、石畳をはがしてはだめだと、おそらく一瞬で終わる話だと思うのです。こういう都市建設の原点から、我々はもう一度見直していかないといけない。表面的に一部だけきれいにしたり変えたりしても、とても浅いものになってしまいます。私自身も、もっといろいろな勉強をしなくてはいけないと思いましたが、おかしいと思うことは、やはり止めなくてはいけないと思っています。

そのような考えから、今日、公務員宿舎の緑の話もありました。本当に樹木が切られてしまいました。私は、とにかく樹木は切るな、とにかく切らない方向にしなくてはだめだという話をしています。もちろん、どうしても切らなくてはならないものも出てきますが、きちんと、樹木を保全するガイドラインをつくる必要があるということで作成を進めています。樹木をどのようにきちんと守っていくかという基準をつくっていかねばいけません。公務員宿舎がなくなっていく中で、一緒に樹木もなくなってしまえば、がらりとまちの風景が変わってしまいますし、先ほど、雨宮先生がおっしゃっていましたけれども、本当にぱっきりと樹木を切った跡に建ったマンションの広告に、緑豊かなつくばと書かれることや、塗り壁のようなマンションが立ち並ぶことは好ましくない。あまり言うとな怒られるのですが、強

い意志を行政も持たなくてはいけないという問題意識です。

上野さんに里山の話もいただきましたが、里山というのは、多田さんのお話にもあった文化的景観のまさに象徴であり、人の手が入ることによって、よりよい状態で保全されていく、非常に価値のあるものだと思います。実は、私、ジャパンタイムズが事務局になっているSatoyamaコンソーシアムという全国のネットワークに当初から賛同しておりまして、つくば市も現在、加盟をしています。里山をどのように守っていくかという思想の中に、学べるものや、そこで市民が得るものが非常にたくさんあると思っています。一昨日ぐらいに、ジャパンタイムズに私へのインタビューが掲載されたのですが、里山を軸として景観を考えたり、地域の活動を考えていくなど、いろいろしていきたいと思っています。

今日、真っ先に多田さんから筑波山の周りが残念というご意見いただき、のぼりや看板などについても、厳しいご指摘をいただきました。どのような景観が本当に必要なのか、観光地として何が必要なのかを、全体的に考えていかななくてはなりません。次のステップとして、こういうことを地元の皆さんと一緒にしっかり話し合う機会をつくっていききたいと強く思いました。デザインという言葉もありましたが、いわゆる一貫した美意識のようなものがないまま、今日に至ってしまっていると思います。一つのきちんとした価値体系や指標を持って、どういう景観をつくっていくか、守っていくかということを考えていくことがすごく大事だと思います。

景観というのは形だけの話ではなく、心象的なものでもあると思いますので、そこにつながる景観をどうみんなで一緒に描いていけるかということが本当に大事な部分だと思っています。逆に、このような動きがきちんと機能することで、研究学園都市と、昔からのつくばの断続を、一つの連続につなげていけるのではないかと感じました。

そういうことを含めて、今私は市政で、国連が定めた持続可能な開発目標SDGsの考え方を市政の中心に据えています。このSDGsの枠組みとも組み合わせながら、いろいろな取り組みを進めています。ジオパークなどは今、吉原さんにも非常に一生懸命ガイドをしていただいています。景観まちづ

くりについても、同様に、地域の皆さんと一体となって取り組みを進めていきたいと思っています。今後も景観まちづくりを進めていきますので、これから、その表明をいたします。

**地域が一体となった協働により、筑波山を初めとする恵み豊かな自然や、万葉の時代から続く歴史と文化、筑波研究学園都市の町並み等、先人から引き継いだ資源を生かした美しい景観を実現するとともに、これらと調和のとれた観光振興により、故郷の景観を未来の世代へ継承します。**

平成 30 年 3 月 17 日 つくば市長 五十嵐立青

ぜひ、これから、景観まちづくりに向けて、皆様のお力をお貸しください。今日は本当にありがとうございました。